「産み」を哲学するとはどういうことか
――哲学と経験

居永正宏[1]

膨大なことが、いのちを産むことをめぐって、空白のままとりのこされていると思います

人間の営みのあらゆる側面のカオスをつめこんだまま

―森崎和江

男は無根拠性と死が嫌いだから、自分が産み出されたことが気に入らない

―ボーボワール

はじめに

筆者は、「産み」という主題を哲学的に考察するべく試論的な考察を重ねてきた（居永 2012a; 2014）。しかしそれらにおいては、先行研究（と考えられるもの）の批判的考察や、「産みとは何か」という直接的な問いが中心であり、男性哲学者である筆者が「産み」という主題を考察するための方法論的反省が十分ではなかった。そこで本論文では、そもそも「産み」を哲学するとはどういうことか、なぜいままでそれがなされてこなかったのかという少しメタ的な視点からの議論を通して、今後「産み」の哲学をどのように進めて行けばよいのかを改めて考えてみたい。

第１章　「産み」はなぜ哲学的に主題化されてこなかったのか

生の終端である死は、人間存在の普遍的な条件として、哲学の永遠の主題ともいうべき地位を得ている。それに対して、生の端緒であり、同じく人間の普遍的な条件であるところの「産み」は、奇妙にも（西洋）哲学の伝統的な考察からは抜け落ちてきたと言ってい

[1] 居永正宏（いながまさひろ）日本学術振興会特別研究員 PD（関西大学）、大阪府立大学客員研究員

いだろう[2]。

その原因は、純粋に理論的な不備にあったのだろうか。つまり、伝統的な理性主義、意識中心主義に基づいた哲学体系は、身体や生命の次元を捉えられるものではなく、就中「産み」を捉えられる理論ではなかった、ということだろうか[3]。それは、例えばニュートン力学では説明できない観察事実があった、というのと同じようなことなのだろうか。しかし、19 世紀から 20 世紀にかけての所謂「生の哲学」など、生命や身体を中心に据えた哲学理論も存在している。そして、その中でも特に「産み」を捉えるポテンシャルを秘めていると思われるメルロ＝ポンティの現象学的身体論においても[4]、性的身体についての議論はあるものの、妊娠・出産といった「産み」をめぐる身体性についてのまとまった議論は見られないのである。

また逆に、「産み」という主題が欠如しているのは、単に主題選択の優先順位の問題である、と考えることもできるだろう。つまり、これまで特に「産み」が主題化されてこなかったのは、それより重要な主題群（善、正義、神、自我、etc……）があったからであって、あえて「産み」という主題を論じたければ、これまでに構築されてきた哲学理論を適宜応用すれば足りる、という考え方である。しかし、『饗宴』でソクラテス（が代弁するディオティマ）が「産み」について論じようとしたときに、身体的「産み」の次元は素朴な生物学的再生産として簡単に片付けられて議論は早々に詩や法律の創造へと横滑りしていき、妊娠・出産の生々しい次元は遠ざけられてしまったように、既存の哲学的方法論（超越論哲学、現象学、分析哲学、実存主義、etc……）をそのまま持ってきて「産み」という新しい主題を従来通りの方法で捉えようとしても、それらの方法論が構築された文脈に回収されてしまうことで、そもそも「産み」の哲学的主題化が秘める可能性が取り逃がされてし

[2] 西洋の哲学的伝統からの「産み」の欠如については、Ruddick (1995) の第 8 章がまとまっており、以下の記述の参考にした。
[3] 実は、理性や意識中心の哲学では、「産み」だけではなく死も「意識の虚無化」のように観念的に捉えられるしかなく、本来的な「生の終わりとしての死」を捉える事もできないのだが、それも見過ごされてきた。この点に関しては居永（2012b）参照。
[4] 実際、メルロ＝ポンティは本発表後半に触れるフェミニズム現象学の言説中では「産み」を論じるためによく参照される。その中には、『見えるものと見えないもの』の「キアスム」や「肉 chair」の概念など、後期メルロ＝ポンティには、彼自身が「産み」を主題化する構想があったように思われるという指摘もあり、筆者も同感である。

まうように思われる[5]。それに、そもそも死と同じ重みがあるはずの「産み」という主題がそのような低い優先順位に置かれてきたということ自体にも違和感がある。

このように考えてくると、これまでの哲学的考察に「産み」の主題が抜け落ちていたのは、結局、哲学の中心を担ってきたのは、妊娠・出産を経験しない、「産まない」男たちであったからだ、ということに行き着くように思われる。普遍性を旨とする哲学者も、思索においてジェンダー・バイアスから逃れることはできなかった、ということだ。

Shaw (2012) が指摘するように、一見すると、哲学者は奇妙な思考実験を好む。デカルトの悪魔にはじまり、コウモリであるとはどのようなことか、培養液の中の脳ではどうか、他人は「哲学的ゾンビ」ではないのか、分子スキャンによって火星へテレポートしたとき人格の同一性は保たれるのか等々、想像力という点では哲学者に限界は無いように思われる。そこから言えば、その想像力のうちには、当然、人類の半分が実際に経験している妊娠・出産も含まれてよいように思われる。しかし、そうではなかった。それは、（男性）哲学者が想像力を飛翔させている（と思っている）それらの思考実験は、実際のところ、心身問題や独我論といった本質的に同じモチーフの周りをぐるぐる回っているに過ぎないからである。「哲学者が思考実験に引きつけられてきた理由は、それらが馴染みのないものを想像する努力という楽しみを与えてくれる一方で、彼らに快適で馴染みのある諸特性を想像することを密かに許しているからである」（Shaw 2012, 145）。

Shaw はこのような分析を踏まえて、男性哲学者が妊娠・出産を含む女性的経験を理解するには、結局、社会文化的なジェンダー秩序への反省とその変化が必要だと言い、筆者もそれには同意する（ボーボワールを始めとする女性自身による哲学的試みは既にあるが、それについては本論後半で触れる）。しかし、男性哲学者が日常的なジェンダー平等の感覚を養うことと、それに支えられて「産み」を哲学的に把握することは次元が異なるはずである。もちろん両者は不可分だとしても、筆者が目指すのはあくまで後者である。その哲学的把握の手掛かりとして、ここで一つの「思考実験」をしてみたい。

[5] 例えば、アリストテレスの形而上学的生物学（男は形相、女は質料）、カントの人格論（出産は新しい人格の誕生）、ショーペンハウアーの生殖論（男は意志、女は知性）などが例として挙げられるだろう。

第 2 章　「産み」についての一つの「思考実験」

もし私たちが次のような生物であったらどうだろうか。その生物は、人間に似た身体を持つが、性別の区別がない。全ての個体が腹部に子宮様の器官を持ち、その中には当人が生まれたときから胎児のような胚がある。その胚は、私たちが成人するまでゆっくり持続的に成長し、私たちは月に一回その胚から出る老廃物を体外に排出する。たまに自分のお腹が空腹で鳴るような感じがするが、それが実際にはその胚の動きによる場合も多い。成人した後、胚の成熟が完了した時点で私たちは痛みを伴いながらそれを体外に排出する。そして、子宮様器官にはまた新しい胚が生み出され、胎内での成長と排出の過程が繰り返される。この過程は、その生物の寿命が終わりに近づくまで繰り返される。つまり、この場合、私たちの身体は、常に胎児のような胚を含んだ身体であり、その胎児は産まれた後、私たちのケアを必要とする他者となる。さらに、この胎児が十分に健康な状態で産まれてくるには、誰かパートナーと親密な関係を築いて生活を営んでいる必要があるとする。つまり、自分の胎児を産むという営みは、自己完結したものではなく、他者との依存関係においてしかなされない。もし私たちがこのような生物であったとすれば、そのとき私たちの自己認識はどのようなものになるだろうか。素直に考えれば、このような身体観において、「自己完結した理性的な意識」が前面に出てくるとは考え難く、やはり身体における自己と他者の両義性、他者とのケア関係が重要視されるだろう。

この「思考実験」の要点は、その生物がいわば常に妊娠中の状態にあり、常に「産む」可能性を孕んでおり、またその可能性を実現するには他者との共同が不可欠だというところにある。ハイデガーが人間とは死に向かう存在であると言ったように、この生物は常に「産み」の可能性を抱えて生きているのである。そして、この「思考実験」の記述が進むに連れて感じられたかもしれないが、この「思考実験」は、方法的に反事実的な仮定をする「デカルトの悪魔」型の思考実験とは正反対に、まさに私たちとは実際にそうなのではないか、という状況を描くものである。つまり、上の「思考実験」が私たちに想像させるのは、私たちは、「産み」を営む人間として――男性哲学者にとっては、生物学的には「産めない」男性的身体という次元を超えて――まさに上記のような生物ではないのか、とい

うことなのである。そもそも、上の記述が「思考実験」でありうるのは男性哲学者にとってのことであって、「女性」にとっては単なる事実の記述なのかもしれない。

かつてラディカル・フェミニストのシュラミス・ファイアストーンが、女性の抑圧の原因は女性が産む性を担っているからであるとして、女性を産みから解放すべきだと唱えたことがあった[6]。それは、「人工子宮による体外発生」と「親子関係を解体した上での両性及び社会による育児」というものであり、それも一つの思考実験であったと考えていいだろう。それと対比すれば、上の思考実験は、女性を産みから解放するのではなく、男性を「産み」へと巻き込むという、逆の可能性を描くものだと言える。

実は Condit (2010) が、これと同じ発想に基づいて、男性は産む身体を獲得すべきだというラディカルな主張を行っている。Condit の主張の文脈は、差別と抑圧の構造の唯物論的批判――ファイアストーンを逆転して、女性の抑圧（家父長制）の原因は女性が産む性だからではなく、男性が産まない性だからである――であり、本論のような「産み」の哲学的把握とは異なってはいるが、男性性に「産み」を組み込むことで（男性の）認識の転換を図ろうとする点は、上記の思考実験と重なる。ただ Condit はそこから、ファイアストーンが技術的に人工子宮を作るべきだと主張したのに呼応して、遺伝子操作や臓器移植によって男性身体を実際に肉体的に妊娠可能な身体へと改造するべきだというような――レトリックかもしれないが――些か現実離れした主張を引き出している[7]。

しかし、この Condit の主張を単に非現実的だからといって退けてしまっていいのだろうか。以前の論文（居永 2012a; 2014）でも繰り返し述べてきたように、「産み」の哲学は、「私の誕生（＝親という他者による私の産み＝二人称の産み）」ではなく「他人が産むこと（＝三人称の産み）」でもなく、「私が他者を産むこと（＝一人称の産み）」を第一の主題と

---

[6] 以下適宜改訳。「自然は、人類の半分が全人類の子供を産み育てなければならないという根本的な不平等を生み出し、それは後に男性の利益に基づいて補強され、制度化された」（Firestone 1970, 205［254 頁］）。更に、ファイアストーンにとって妊娠・出産は単に不平等を生んだだけではなく、それ自体としても忌避される。「はっきり言わせてもらえるなら、妊娠は野蛮である（barbaric）。……／さらに、出産は痛みを伴う。それはあなたにとって良いものではないのだ」（ibid. 198［248 頁］強調原著）。

[7] Condit は、さしあたりは FtM の妊娠やパフォーマンス・アートの例を挙げている。Condit が挙げているものではないが、同じモチーフの作品として日本の現代美術作家、岡田裕子の「俺の産んだ子」（2003）参照。<http://www.j-wave.co.jp/blog/helloworld/2011/11/cyberlab2_1.html>（2014/6/17 取得）

するべきものである[8]。それは、死の哲学が他人の死（二人称・三人称の死）ではなく私の死（一人称の死）をまず主題とすべきであるように、である。しかし、死とは異なり、身体的な構造と機能の差において、「産み」には決定的な男女差が存在するように思われる。過去、女性には理性がないため女性は哲学することはできないと言われたが、それは幻想であった。しかし、こと「産み」に関する身体の差は幻想ではありえないのではないだろうか。そうだとすれば、やはり「産み」の哲学的考察は――Condit の言うような身体改造が実現しない限り――男性哲学者には不可能なのだろうか。それは、視覚を持たない人が視覚の現象学を試みるようなもの、不死の存在が死の哲学を試みるようなものなのだろうか。そのような基本的な疑問を携えて、ここで男とお産に関する文化人類学の知見を参照したい。

第 3 章　文化人類学が示す男とお産の一事例

男性身体は、生物学的には妊娠・出産しない身体である（もちろん、個体としては妊娠・出産できない女性身体も存在するが、それはここでは措く[9]）。しかしそれは、人間的営みとしての「産み」に男性が関わらないということではない。なにより、生殖行動を経て子どもが産まれる場合、少なくともその生殖行動に何らかの形で男性が関わっていることは間違いない。したがって、一つの可能性として、男性の生殖行動の男性学的反省から、男性にとっての「産み」とは何かを問うこともできるだろう。その可能性には本論最後で触れることにして、ここでは、特に出産という場面における男性の関わりに焦点を当てる。

ただ、その前に一点確認しておきたい。たしかに、哲学的な問いとしての「産みとはな

[8] 先の思考実験も産みの哲学的記述の一つだとすれば、それは何人称の産みを語ったことになっているのだろうか、という疑問が当然あるだろう。それに対しては今のところ、問題はその思考実験を一人称として理解するとはどういうことか、であって、思考実験の記述自体から自動的に人称性を確定することはできないのではないか、と応えておきたい。また、ここで言う「一人称の産み」には、そこで産まれた他者を一人称の私に回収できるという含意はない。おそらく一人称の産みと二人称の産みは分かちがたく絡み合っているのだが、その点の追求は別稿に譲る。

[9] 更に細かい点だが、「無意識状態で出産した女性は（一人称的な）産みを経験していると言えるのか」という疑問に関しては、産みの経験を肉体的出産体験に還元することはできないというのが本論の主旨であるから、（少なくともその女性が産後に意識を取り戻す限り）「経験していないとは言えない」と言うことになるだろう。出産を中心としながらも産前産後の経験の広がりの中で産みの経験は成り立つからである。ただ、その具体的な基準や内容は今後考察していく。

にか」は、肉体的な出産の瞬間やその前後の一定期間だけに関わるものではなく、究極的には人間の条件としての「産み」を考察するものである。しかし、例えば「死とはなにか」という哲学的な問いに答えようとするとき、「死とは生のいかなる時点にも常に既にかかわる不可能性の可能性なのだ、云々」と論じて死を生の全体に染み渡らせることも可能であり、そのような議論もある種の真理を捉えてはいる。しかしそれだけでは、「結局、生の終点としての死とは一体何なのか」という問いが未消化のまま残される[10]。それと同じように、「産みとは生のいかなる時点にも関わる云々である」という議論も必要ではあるだろうが、それだけではなく、それ以前に、やはり出産という契機を焦点化しなければ、「産みとは何か」という問いに十分答えたことにはならないように思われるのである。そのような意味から、ここでは「産み」の特権的な瞬間として出産に焦点を合わせたい。

さて、男とお産の関係である。愛媛県の漁村・山村のお産文化のフィールドワーク調査を行ってきた文化人類学者の吉村典子は、「……これまで、出産に『男性が進んで手助けをする』という習俗の存在が多くの研究者から報告されながら、なぜか『男性の出産参加は古来より日本ではタブーであった』とする見方が支配的で……」（吉村 2008, 524-525）という認識の下[11]、自身の調査から明らかになった夫婦共同型出産の習俗と、その体験者のインタビューを紹介している（吉村 1987; 1992; 2008）。

吉村の調査は、愛媛県の瀬戸内海に浮かぶ島々と、同県の山村大洲市上須戒（かみすがい）地区をフィールドとして行われ、後者において夫婦共同型出産の習俗が記録されている。当該地域では、伝統的に自宅での夫婦共同型の出産が行われていた（もちろん、他の家族や近隣住民の援助もあった）。さらに、男性がお産に関わることが普通であったため、公的な助産師制度が整備される以前は、いわゆる女性の「産婆さん」だけではなく、「産じ

[10] 脚注 3 参照。

[11] 吉村はその後を、「……そのためにいまだに、夫婦で共に出産したいと希望することは、産科医や助産師など助産専門家に任された出産の場を、素人判断で乱す不心得者扱いされるばかりでなく、日本人らしくない恥ずべき行為の希望者として、多くの助産専門家たちから嫌悪され、拒否される大きなよりどころとなっているので……」（Ibid, 524-5）と続けている。この点に関しては、例えば電通ジセダイ育成委員会（2008）には夫の出産立ち会い率が 49.8%（首都圏）という報告があり、現状とはズレがあるかもしれない。ただし、この「出産立ち会い」と、吉村がいう「夫婦共同型出産」とは、そこに関わる当事者の種類と関係性において、似て非なるものだという点には注意する必要がある。

いさん」と呼ばれる男性もいたようである[12]。現在の上須戒には第二次大戦後の病院出産への移行の流れも及んでおり、夫婦共同での自宅出産はほとんど見られないようだが、吉村は経験者の体験談を通してその習俗を記録している。夫婦共同型の出産のスタイルは、単に湯を沸かすといった手伝いや「立ち会い」ではなく、妻を後ろから抱えて一緒にいきむなど、妻と一体となってお産に臨んでいる事が伺える。夫は、自分の母親のお産の観察経験や、父親や親族からの教示によってお産のやり方を学ぶそうである。

体験者の声は、次のようなものである。

（1900 年生まれの U 子さん）わしらはなーんもたいしたお産なんかしとらん。ぜーんぶじいさんがかかえてくれてしただけ。へその緒もじいさんが切って、生まれた子を洗ろといてから山に行きよったけんなあ。……なんというても、わしらはお医者も呼んどらんし、お金もかけとらん、猫とついな（同じような）お産しか、しとらんけんなあ、……（吉村 1992, 24）

（1922 年生まれの B 氏）ようやく強い陣痛が来始めた次の日の夕方には、自然に、あおむけにねている妻の頭をあぐらを組んだ自分の膝の上にのせ、一所懸命、妻の手をにぎりしめ、いっしょに陣痛に合わせて、「それ、もうひとつじゃ、がんばれ、うーん」と声をかけて自分も足を踏んばっていたとか。「なんちゅうこっちゃ！　これほど苦しんで産むんか！　知らなんだ。一緒にいきんでやってよかったと心底思った」とも、第二子の時は最初から、「よっしゃ、わしが手伝っちゃる」と、その気でのぞんだとも語ってくれた。（同書, 37）

（1950 年生まれの C 氏）「……やってみて驚いた！子どもちゅうのはな、生まれた時は死んだもんと同じ汚い紫色しててなあ、……その汚い紫色しとる子が、みるみるうちに

[12] ちなみに、現在の日本の国家資格で性別制限（女性限定）があるのは助産師資格のみである（もちろん現実的に女性が排除されている資格は多数ある）。海外（イギリス、カナダ、アメリカなど）では性別制限はなく、実際に男性の助産師もわずかにいるようである。ちなみに、厚生労働省（2013）によれば、日本では産婦人科医は男性がおよそ７割（医師全体では８割）である。

赤い色の赤子に変わっていくんよ。感動する。病院やったら絶対見せてくれへんで。あんなに大変な中から一所懸命生まれてくるんやから、生命は大切にせなあかん。わしもこうやって産んでもろたんかと、涙が出て止まらんかった。子どもにも生まれた時のようすをよく話してやって、生命はそまつにしちゃあいかん。自分のも他人のもじゃと、わしはよく言うんよな。（同書, 38）

吉村はこれらの体験談を次のようにまとめている。「B 氏や C 氏だけでなく、この村で夫婦協力型のお産をした、上は 1899 年生まれから下は 1950 年生まれまでの男性たちは、大部分の人が A 氏、B 氏や C 氏と同じ感想を持っている。彼らの心の中の「妻のお産についてのイメージ」が、参加を契機としてどんどん解体され、また新たに事実に即して再構築していった様子が手に取るようにわかる。さらに再構築された認識が、「産後」に彼らのお産についての認識だけでなく、夫婦観や生命観という人生観の基本にあたる大切な部分まで、大きく変えていたことがわかる」（同書, 38-39）[13]。

このような例を見た上で、「産めない男性にとって、産みを哲学的に考察することは可能なのか」、という問いに戻ろう。まず、「産めない」という点については、上の調査で吉村が示したように、確かに自らの身体の生理作用として産むわけではなくとも、お産という活動に主体的に関わるという意味で、単なる「立ち会い」を超えて、「産んでいる」男性がいるように思われる。その意味では、男性の身体的な構造と機能に基づいて、男性を人間的営みとしての「産み」から排除することはできないはずである[14]。

しかし、男性にも「産み」の経験の可能性があるからといって、そこから自動的に哲学的考察が出てくるわけではない。つまり、死の哲学が自らの死の危険や友人の死の経験の感想文ではないように、「産み」の哲学は、「産み」を観察・体験した男性（哲学者）の単

[13] ただし、このような「成功例」以外にも、夫の気が弱く出産に向いていない場合や、難産になった場合など、夫婦の精神的・肉体的負担が過大になりかねない場合も指摘されている。また、ここではいちいち文献を挙げないが、上須戒以外にも夫婦共同型出産の習俗は散見されるようである。

[14] 確認だが、これは女性の産み（A）と男性の産み（B）に共通する中性的な産み（C）を理念として作り上げ、C こそが産みの原型であり、A、B はそのバリエーションだと主張するような議論ではない。それでは男性による女性的経験の搾取の再演にしかならないだろう。産みとは原理的にジェンダー的営みであって、A と B は C に媒介されて繋がるのではなく、直接関わり合うのである。これは、産みの哲学には性的差異の哲学が含まれることを意味している。

なる感想文ではない。しかし逆に、当然のことだが、「産み」の哲学的な考察は「産み」の経験に根ざしていなければならない。したがって、「産み」を考察しようとする（男性）哲学者にとっては、まず「産み」を自らのものとして経験した上で、それを哲学的に捉え直すという、二つの重なり合う課題が課されることになる。そのような課題を前にして、私たちは、そもそも哲学と経験はどのような関係あるのか、という大きな問いへと送り返される。

第４章　哲学と経験の関係

一般的に、私たちの経験は、哲学的考察の単なる対象なのではなく、その考察を成り立たせる基盤として、哲学を支えるものでもある。観念論、現象学、分析哲学など、哲学的にいずれの行き方を取るにせよ、それらの議論は何らかの（少なくとも想像上の）人間的経験に基づき、その経験を普遍的なものと前提した上で議論が行われる。例えば、些か乱暴に言ってしまえば、デカルトの方法的懐疑はある種の思惟経験に基づいているし、バークリーの知覚論はある種の視覚経験に、フッサールの現象学的還元はある種の意識経験に、ウィトゲンシュタインの「箱のなかのカブトムシ」はある種の自我－他我経験に基づいている。

しかし、第１章で論じた通り、普遍的と考えられる思考実験とその前提となる「経験」も、実はその思索を行っている哲学者の経験上のバイアスに縛られている。したがって、もしそのバイアスを超えて経験を広げることができれば、それに対応して思考実験や思索の可能性も広がっていく。例えば、思惟経験から身体経験への経験の広がりが、デカルト的な思惟する自我の哲学からメルロ=ポンティ的な生きられる身体の哲学への展開と対応していたように。または、西田幾多郎の「無の哲学」が彼自身の座禅体験と密接に関わっていたように。そうだとすれば、哲学的営みが進むべき方向の一つは、このような意味での「経験」の可能性を拓いていくことにあると言ってもいいだろう。そして、そのような方向での大きな可能性の一つが、「産み」についての経験と哲学だと思われるのである。

そのとき、考察を支える「産み」の経験を（男性哲学者が）どうやって得るのかがやは

り問題となる。もちろん、前章の吉村のインタビューにあるような「（立ち会い）出産」をめぐる実体験が中心となることは間違いない。しかし、間接的に、それを記録した文献等の資料を通して、自らの経験を「産み」の経験へと広げていくこともできるのではないだろうか。それは例えば、先の吉村の調査が示したお産の例が、体験当事者ではない男性読者に一種の新しい認識を与えるように、である。自らの個人的体験を踏まえた上で、そこに留まることなく、それらの蓄積されてきた文献を通して考察を重ねることで、そもそも「産み」とは何なのか、という問いへと考察を進めることが可能になるのではないか。そうすることによって、男性哲学者による「産み」の哲学的考察が可能になり、またそこから反照的に、日常的な次元での「産み」の経験も可能になるのではないか、と思われるのである。

ここまで考察を進めてきて、参照すべき分野として発表者に立ち現れてきたのが、女性的経験の現象学的記述を試みている「フェミニスト現象学 Feminist Phenomenology」と呼ばれる分野である。「フェミニスト現象学」という言葉が広がったのは 90 年代以降だが、その始まりは 49 年のボーボワールの『第二の性』にある女性の経験の記述に求めることができ、その後、70 年代の Iris Marion Young や Sandra Lee Bartky などが「現象学」という用語を意識的に用い始めた。英語圏では継続的に関連した出版物があり、2000 年以降にも数冊のアンソロジーが出版されるなど、思索が続けられているようである。フェミニスト現象学は、従来の（健康で障害のない男性的）主観による現象学への批判を背景としているため、それが対象とするのは、必ずしも妊娠・出産をめぐる経験だけではなく、女性の思春期の抑圧体験、差別をめぐる経験、閉経と老化、さらには女性経験にとどまらず障害や差別の経験一般にも及ぶものだが、やはり産むことをめぐる経験は常に中心的な主題の一つとなっている。

このフェミニスト現象学の全体としてのレビューは今後の課題として、さしあたり入手した（上述とはまた別に近年出版された）「産み」を主題とするアンソロジー（O'Reilly (Ed) 2010; Lintot, et al. (Eds) 2012; Adams, et al. (Eds) 2013）に収められた「フェミニスト現象学」関連論文を見る限りでは、妊娠・出産そのものの独自の現象学的記述を展開するというよ

りは、レヴィナスの「他者」、メルロ=ポンティの「間身体性」や「肉 Flesh」、さらにはデリダの「歓待」などを妊娠・出産に当てはめて論じるものが多く、私見の限り、それらの哲学者の著作からの素直だが独創性のない引用に留まり、独自の理論展開は乏しい感がある。居永（2014）でも指摘したが、「産み」とそこで産まれてくる「子ども」を捉えるためには、それらの哲学者が取り組んできた他者論一般、身体論一般とは異なる、もしくはそれ以上の言説が必要なはずであり、それは妊娠・出産の体験的記述にレヴィナスやメルロ=ポンティの引用を当てはめるだけで生まれるものではない。他方で、英米系のフェミニズムの理論的な言説はイリガライやクリステヴァのような精神分析系の言説を参照する志向が強いが、そちらについては筆者としては基礎文献読解のレベルから今後の課題であるのでなんとも言えない。ただそれらを引用している論文を読む限りでは、イリガライやクリステヴァの理論が主に生まれた子（娘）の視点からの言説であるという点を批判し、産む母親の視点から精神分析学的に母子関係を捉える可能性に言及したり、それを萌芽的に試みたりしているようである。いずれにせよ、フェミニスト現象学による「産み」をめぐる言説の評価は今後の研究課題である。

翻って日本の状況を見渡してみれば、青木やよいのエコ・フェミニズムが、「母性主義」、「差異派フェミニズム」として批判され、80 年代後半には言説として衰退して以降、フェミニズムの文脈で「産み」を哲学的に考察するという試みはほとんど見られなくなっている[15]。ただ、フェミニズムの近くで「産み」について発言してきた森崎和江に、次のような鋭い記述が見られる。

> ある日、友人と雑談していました。彼女は中学の教師でした。私は妊娠五ヶ月ぐらいでした。／笑いながら話していた私は、ふいに、「わたしはね……」と、いいかけて、「わたし」という一人称がいえなくなったのです。……私は息をのみ、くらくらと目まいがしました。……私の総体は、世間の共通の言葉からこぼれ落ちていました。よく知って

[15] わずかに金井淑子の試みがあり、それについてはフェミニスト現象学のレビューと合わせて今後検討する。

いた「わたし」が消えていました。夜、おそろしくて涙が流れるのです。（森崎 1989, 147-148）

「わたし」ということばの概念や思考用語にこめられている人の生態が、妊婦の私とひどくかけはなれているのを実感して、はじめて私は女たちの孤独を知ったのでした。それは百年二百年の孤独ではありませんでした。また私の死ののちにもつづくものと思われました。ことばの海の中の孤独です。／いえ、ことばが不足しているのです。概念が浅すぎるのです。（同書, 156, 傍点引用者）

妊娠・出産を経験した森崎自身にしてみても、それを言語化するには言葉が不足し、浅すぎる概念しか手にしていないというこの記述は、「産み」の哲学的考察の必要性をいや増しに感じさせる。単なる体験談でもなく、逆に既存の哲学理論を天下り的に当てはめるのでもない、経験と哲学的考察がお互いを変容させながら、「産み」の輪郭をそのまま捉えることができるような、「深い概念」を生み出すことが、私たちに求められているようである。

おわりに

発表者の今後の課題としては、先にも述べたように、まずフェミニスト現象学において「産み」がどのように捉えられているのかを跡付ける作業を行いたい。それによって、妊娠・出産する「産む身体」の現象学がどのように語られているのかを明らかにする。

その成果を踏まえて、「産み」の哲学を目指す男性哲学者として必然的に課される課題が、「産み」をめぐる男性的性・男性的身体の現象学である（「男性的」という括りがそもそも可能なのかという加藤（2006）の論点も含めて）。出産に焦点化した第３章のはじめに、「男性の生殖行動の男性学的反省から、男性にとっての「産み」とは何かを問う」という可能性について触れた。女性身体における「産み」を考えるときには妊娠・出産に焦点化しがちではあるが、自然生殖の場合、その前段として必ず生殖行動が伴う。男性の場合には――確かに吉村が示したようにお産への主体的参加はありうるとしても――身体的には妊

娠・出産という契機が存在しない以上、生殖行動という契機が女性に比べて前面に出てくる。その意味で、男性にとっての「産み」の考察は、男性にとっての生殖行動とそのパートナーとの二者関係、それに基づいた子どもとの三者関係への広がりを含んだ視点から考察されなければならないように思われる[16]。それは、「産み」という視点からの、男性による男性的性の当事者的考察という、男性性研究の中心的となる一つの領域を開拓するものになるだろう。

※本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25-1743 の助成を受けたものである。

参考文献

Adams, S. L., & Lundquist, C. R. (Eds.). (2013). *Coming to Life: Philosophies of Pregnancy, Childbirth, and Mothering*. Fordham University Press.

アリストテレス（1988）島崎三郎訳「動物発生論」『アリストテレス全集９』岩波書店.

Condit, Deidre M. (2010). "Reproducing Possibilities: Androgenesis and Mothering Human Identity." *21st Century Motherhood*. Ed. Andrea O'Reilly. Columbia University Press. 181-195.

電通ジセダイ育成委員会（2008）「News Release 電通、第１回「子育てに関する調査 2008」を発表」<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2008026-0424.pdf>（2014/06/18 取得）.

Firestone, Shulamith. (1970). *The Dialectic of Sex*. Women's Press.（林弘子訳『性の弁証法』評論社, 1972 年）

居永正宏（2012a）「他者の産出と自己の誕生肯定」『現代生命哲学研究』第 1 号 46-68.

――――（2012b）「「生きている私の死」と死後に残るもの―ベルクソンの生の哲学による死の理解―」『哲学』日本哲学会、第 63 号 135-154.

[16] フェミニスト現象学においても、妊娠・出産の現象学は必然的に生殖行動の現象学を伴っていてもおかしくないのだが、先に上げたアンソロジーを概観した限りでは、その点はあまり意識されていないようである。実際、記述が始まるのはたいてい妊娠した時点からであり、胎児・乳児との二者関係が焦点化され、男性との二者関係や子どもを含めた三者関係という視点はほとんど出てこない。

――――（2014）「「産み」の哲学に向けて（１）先行研究レビューと基本的な論点の素描」『現代生命哲学研究』第 3 号 88-108.

カント（1979）森口ほか訳「人倫の形而上学」『世界の名著 39 カント』中央公論新社.

加藤秀一（2006）「性的身体ノート―〈男語り〉の不可能性から〈新しい人〉の可能性へ―」荻野美穂編『身体をめぐるレッスン２　資源としての身体』岩波書店.

厚生労働省（2013）『平成 24 年（2012）医師・歯科医師・薬剤師調査の概況』<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/12/dl/gaikyo.pdf>（2014/10/25 取得）.

Lintott, S., & Sander-Staudt, M. (Eds.). (2012). *Philosophical Inquiries into Pregnancy. Childbirth, and Mothering*. Routledge.

森崎和江（1989）『大人の童話・死の話』弘文堂.

O'Reilly, A. (Ed.). (2010). *21st Century Motherhood*. Columbia University Press.

プラトン（2008）久保勉訳『饗宴』岩波文庫.

Ruddick, Sara. (1995). *Maternal Thinking*. Beacon Press.

Shaw, Joshua. (2012). “Why Don’t Philosophers Tell Their Mothers’ Stories?” *Philosophical Inquiries into Pregnancy. Childbirth, and Mothering*. Eds. Sheila Lintott & Maureen Sander-Staudt. Routledge. 138-150.

ショーペンハウアー（1974）有田ほか訳『ショーペンハウアー全集 7　意志と表象としての世界・続編（３）』白水社.

吉村典子（1987）「山村における出産慣行の一例（予報）：男性参加の事例として」『呉女子短期大学紀要』1, 57-66.

――――（1992）『子どもを産む』岩波新書.

――――（2008）「四国山地・上須戒の出産民俗史--夫婦共同型出産習俗にみる安産への視線」『国立歴史民俗博物館研究報告』141, 523-567